2023 人文社会科学部後援会支援事業報告書

体験型博物館「千葉県立房総のむら」での実習

申請者：添田 仁
事業区分：学生の教育研究活動支援（「情報メディアと博物館」）
テーマ：博物館体験型展示について学ぶ実地授業

日時：2023 年 12 月 9 日（土）
場所：千葉県立房総のむら（千葉県印旛郡栄町）

概要：「情報メディアと博物館」は、博物館学芸員資格に関する科目である。このうち「体験型博物館と仮想空間の本質」について学ぶ時間を利用し、体験型展示を見学・体験するとともに、展示方法や工夫について同館学芸員及びボランティアから解説・指導を受けた。履修学生のうち 25 名が参加した。

実地授業の場は、関東でも有数の体験型博物館である千葉県立房総のむらとした。当日は 10 時に集合し、館内利用にあたっての注意事項を確認した後、各自参加する予定の体験演目の予約を行った。10 時 30 分から総合案内所ふさや 2 階において、同館学芸員から館の概要と体験型展示を準備するにあたっての工夫と課題について説明を受け、その後、館内に復元された江戸期の町並みを歩きながら、ボランティア解説員による解説を受けた。昼食をはさんで、それぞれ体験演目に参加し、演目を担当する職員やボランティアの方々から聞き取りを行いながら、演目を用意するにあたっての工夫と得られる学びについて調査した。

学生の学び：参加した学生からは以下のような感想が寄せられた。

・私は小学生の時に校外学習で「房総のむら」に訪れたことがあるが、大学生となった今再び訪れてみて、懐かしさと共に非常に感傷的な気分になった。それは 10 年ぶりに足を運んだからということももちろんあるが、私たち日本人の心をくすぐる温かみが「房総のむら」には確かにあるのだと感じている。

そしてそこに一役買っているのが解説であると感じた。江戸の文化と一口に言っても、政治や経済、交通、あるいは芸術やファッション、食に至るまで多岐にわたる視点から解説されているのがとても印象的であった。やはり一つ一つの文化に触れて、それらが網の目のように結びついていることを実感してはじめて、当時の社会像や人々の姿がありありと見えてくる。風景を再現しただけでは感じることのできない、人間模様までもが克明に表現されていることがまた訪れてみたいと思わせる背

景にあると肌で実感した。

・基本構想の策定の 3 つの機能の一つとして「伝統文化再認識の場」が挙げられていました。工夫として、入館者に車が走るのを見せないということや、ぼっち笠などその場にふさわしい服を着ることなど様々な取り組みをしていることが印象的でした。

また、リピーター獲得のため、月ごと、日ごとに異なるイベントや体験を提供し、飽きさせないようにしているという話が興味深かったです。実際に配られた体験のしおりを見ると数えきれないほど多くのイベントや体験があり、12 月 9 日に体験できたことはほんの一部だということが分かりました。「お箸作り」や「鉄の小物作り」など、体験してみたいものが多くあるので、一人でもまた行きたいと思います。

ボランティアガイドさんによる町並みの解説では、建物の名称や特徴、何のためにあるのかなど様々なことを学ぶことができました。武家屋敷の敷地が高くなっているのは、屋敷が見えないようにしているという理由があることを知り、武士や農民など身分の違いで全く異なる暮らしをしていたのを目で見て感じることができました。また、江戸時代の人々は物を大切にするという話で、下駄は一年に 1、2 回しか替えないということが印象的でした。イメージで下駄はすぐに消耗して頻繁に替えていると思っていたので、現代の私たちが使う靴と同じ感覚なのだと分かりました。また、客層で話すポイントを変えたり、すぐに解説するのではなく考えさせる時間を設けるなど、興味を持たせるための工夫があることが分かりました。

体験では、「畳のコースター作り」をし、畳について学びました。畳は江戸時代と現在とで中の部分が異なり、江戸時代の畳は藁が用いられているため現代の畳より弾力性があり、転んでも怪我をしにくく寝ると気持ちが良いという話が印象的でした。また、畳の匂いはストレス軽減や集中力アップなどの効果があるという話が興味深かったです。

・特に印象的だったのは、体験演目担当のスタッフが全員元々は素人で、伝統技術に精通した人から指導を受け講師となり、そしてまたそれを他のスタッフへと研修という形で継承し続けていることと、江戸の街並み紹介を行っているのがボランティアの方々だということです。「歴史や文化を保存し、伝承し、また現代の人々に広く理解してもらいたい。」という思いの強さや熱心な姿勢に心を動かされました。また、体験演目で使用している植物（楮や藍など）を房総のむら内部で自給自足で栽培を行っている点にとても驚かされました。

上記の感想からも明らかなように、千葉県立房総のむらは、体験型博物館として有効な学びの場である。ただ、茨城大学からかなり遠く、これまでも交通費が学生の大きな負担とな

っていた。今回希望する一部の学生（7 名）に対して、後援会から交通費を支給することができた。後援会のご支援に心より感謝申し上げます。